

東日本大震災から一年半以上の時間が経ちました。復興にはまだ多くの時間が必要です。被災された方々が、長い道のりを諦めずに辛抱強く歩んで下さるようにお祈りします。

■■■■ 今号の記事 ■■■■

- ・総会・大会報告
- ・教養講座開催
- ・訃報・寄付御礼
- ・公開講演会要約
- ・教養講座要旨
- ・エッセイ

総会報告

2012年6月23日(土)12時30分～13時30分
早稲田大学・人間総合研究センター分室(高田牧舎2階)において早稲田大学心理学会総会が開催されました。

定数37(会員数184名の5分の1)のところ、7名の出席、委任状の提出58通で、7+58=合計55となり、総会の成立を確認しました。矢野裕之氏が議長に選出され、以下の議題を討議しました。

議題1: 2011年度事業報告

- ①2011年5月22日(土)第11回教養講座
「睡眠の正常と異常ー臨床心理学からの理解と支援」 松田英子氏
- ②2011年6月25日(土)公開講演会
「仮想的身体運動としての心」 月本洋氏
- ③2011年10月29日(土)第12回教養講座
「仕事との出会い方、その続け方～就労支援カウンセリング事例と就活川柳・一人百句から考える」 小林源氏
- ④「瓦版」第20号(2011年12月)、第21号(2012年5月)を発行
- ⑤精神生理研究部会、老年学研究部会
- ⑥学会ホームページ、ブログの運営
- ⑦理事会を7回開催

議題2: 2011年度収支決算

まだ最終的な決算書が完成していないので、これから監査をうけることになる。

議題3: 2012年度事業計画

- ①2012年5月19日(土)第13回教養講座
「なぜ構造構成主義は復興支援活動に役立ったのか? ～ふんばろう東日本支援プロジェクトの活動を通して～」西條剛央氏
- ②2012年6月23日(土)公開講演会
「災害と人間行動～災害に負けない しなやかな社会の創造～」 林春男氏
- ③2012年10月27日(土)第14回教養講座
「笑い与健康～笑いの社会健康的・進化的意義と日常的実践」
野澤孝司氏・高橋カレン氏
- ④「瓦版」年2回発行
- ⑤ホームページの運営
- ⑥研究部会の開催
- ⑦名簿の発行のために内容を確認する。

議題4: 役員改選

- ①木村裕先生が早大定年を機に会長を辞され、後任に石井康智先生を選任した。
- ②矢田部多賀子さんが理事を退任される。
- ③その他の理事・監事は継続してつとめる。



公開講演会でお話しされる林春男氏

役員一覧(任期2年)

2012年総会時～2014年総会

役職	氏名	卒年・学部
会長	石井康智	70文
副会長	市原信	73文
理事	小林源	62文
	木村裕	65文
	谷口幸一	72教
	吉川政夫	73教
	柴田良一	73文
	中村誠	74文
	河合美子	79文
	矢野裕之	86文
	黒坂和彦	86文
	乙部和昭	86文
	朝岡美好	90文
監事	松本芳之	74教
	鈴木晶夫	75文

(事務局→朝岡・中村)

大会・懇親会報告

公開講演会

6月23日(土)15時から17時まで小野講堂にて、京都大学防災研究所・巨大災害研究センター教授・林春男先生をお招きし、公開講演会を開催しました。



長年、災害時の人間行動についての研究を続けてこれ、政府の災害対策の委員もつとめられた林先生は、阪神淡路大震災の事例などを元に、どのようなことが被災地で起こるか、いかに対処すべきかということをお話しされた。

昨年の東日本大震災の見聞を経た聴衆も我が身のこととしてお話を伺い、具体的な内容の質問をおたずねした。

アンケートから

・ 広い視点で災害について考える機会を得た。災害弱者となるであろう知的障害児学校の責任者として発災後の復旧についてプログラム作成中です。示唆を受けました。ありがとうございました。

・ 素人にも良く分かる説明でした。一番怖いと思うのは、自分自身の心理状態かもしれないと思いました。年齢・経済状態、健康状態が大きく影響作用することが恐ろしいことです。

・ 災害がいつ起きてもおかしくない状況であることがよく分かりました。また、それに対して、どのように心構えや対策をしておかなくてはならないか、具体的にお話をさせて頂いて大変参考になりました。

懇親会

講演会のあと大隈講堂の先にあるイタリア料理店“イル・デ・パン”で懇親会を行いました。林先生をはじめ、12名が参加。めいめい自己紹介をしたり、近況を語ったり、楽しい宵を過ごしました。



教養講座の開催

第13回教養講座

5月19日(土)早大・戸山キャンパス34号館355教室で、早大大学院商学研究科MBA専任講師の西條剛央先生が「なぜ構造構成主義は復興支援活動に役立ったのか？」という題で講演をして下さった。(お話の要旨は6～7頁)

西條先生は昨年3月の東日本大震災から間もなく“ふんばろう東日本支援プロジェクト”という大きな活動を始められ、お忙しい只中にありながら、急遽、当学会の依頼にこたえて、お話をしに来てくださった。



アンケートから

この催しを何で知ったか？

「ポスター・看板」と「インターネット」がほぼ同数で最も多かった。従来は「インターネット」は少ない傾向にあったが、西條先生の活動においてツイッター・facebookがツールとして積極的に活用されていること及びそれらツールの社会的普及状況等を背景として増加したと思われる。

自由回答欄における全回答数は39件であり、そのうち33件は「関心相関性 信念対立の克服をどう考えるか等、非常に興味深いお話がきけた。」「関心についての部分と感謝についての話はとても参考になった。」など、構造構成主義に関してコメントしたものだ。

第14回教養講座

10月27日(土)早大・戸山キャンパス34号館151教室において、目白大学講師野澤孝司先生をお招きし「笑い与健康ー笑いの社会的・進化的意義」と題してお話して頂きました。講義のあと、笑いヨガティーチャー・高橋カレンさんが笑いヨガの指導をして下さいました。お話の要旨は次号掲載予定。



訃報

早稲田大学名誉教授・本明寛先生が、12月6日、11時7分、逝去されました。享年94歳。
本明先生は長く早稲田大学の心理学の発展のために尽くされ、当心理学会の再興にも力を発揮され、御指導をいただきました。
心からご冥福をお祈りします。

寄付金の御礼

近年、会費免除(卒業後50年)の会員の増加とともに、新規会員が少なく、当学会の資産が減少していることを、会員の皆様にお訴えしたところ、下記のように寄付をいただきました。厚く御礼を申し上げます。会の運営のために有効に活用いたします。

寄付をしてくださった方	14名
寄付の総額	122,000円

公開講演会(要約)

「災害と人間行動～災害に負けない しなやかな社会の創造～」

東日本大震災

去年の3月11日の午後、マグニチュード9という、たいへん大きな地震がございました。海底を震源としていましたので、ほぼ日本中、大津波警報が出るというような津波になりました。この地震は実際には2つの地震が引き続き起こってしまったために、結果的にものすごく大きな地震になってしまいました。海の底が盛り上がる、とくに宮城県の沖合がひどかったわけですが、25メートル盛り上がったと言われていいますから、4千メートルの海底が25メートル上るといことで、大きな津波に襲われました。これは毎年1月に政府の地震調査研究推進本部というところが出す、日本中どこが地震が起きやすいかという地図です。一番高かったのはどこかという宮城県の沖合です。宮城県沖地震と書いてあります。マグニチュード7.5から8程度が99%、それからそのちょっと外側に三陸沖南部海溝寄りというのが80から90%というのが予想されておりました。3月11日はまさしくそこが出発点となって地震が起きた。だから政府の地震調査研究推進本部が言っていたとおりに地震が起きた。

今回の震災は戦後はじめて二万人近い死者が出てしまいました。それまでの最大は阪神淡路大震災の6千5百弱でしたから、とてつもなく死者の数が多かったわけです。2万人も亡くなって、たいへんな被害だと思えますけれども、人口比で見るとですね、一番ひどい宮城県で見ても0.6%くらいにしかなりません。逆に言うと、地震がいくらずいと言われても、99. 何%の人は、それを生き残って、また行かなくてはならないという課題があるんですけれども、いささか防災というのは、生命を救えばいいというところで話が終わっているというのも、注意をして良いかもしれません。

林 春男 (はやし はるお)

略歴

1979年早大大学院博士課程終了後、フルブライト留学生としてUCLAに留学。83年同校より博士号(Ph.D)取得。弘前大、広島大などを経て、1996年京都大学防災研究所・巨大災害研究センター教授。



主な著書

- ・「しなやかな社会への試練－東日本大震災を乗り越える－」(日経BPコンサルティング)
- ・「災害のあと始末 東日本大震災緊急改訂版」(エクスナレッジ)
- ・「組織の危機管理入門」(丸善)
- ・「いのちを守る地震防災学」(岩波書店)など

防災の考え方の進化

防災そのものが、東日本大震災を受けて、いろいろ変わりつつあるように思いますが、防災の世界にずっと首を突っ込んでいると、僕が始めて以来でも、少なくとも3つのアプローチがあって、少しずつニュアンスが変わっているんだということが感じられます。1970年代と21世紀に入るところ、この2つにターニングポイントがあるように思います。①70年代までの日本の防災というのは、基本的には“消防”とほぼ同義というふうに思っていた方がいいと思います。火災予防をするのが防災でした。グッと来たら火の始末というのをたいへん大事なことにしてきたわけです。それが②70年代に入るところで、いろいろ様変わりをします。災害に強い街を作ろうというようなことを一生懸命にしました。右肩上りでいろんなものがどんどん豊かになっていった時代、ものが作られていった時代、と考えると良いのかもしれません。そういうことで街がどんどん様変わりをし、災害に強いということを実現できるんじゃないかという思いがあった時代でした。脆弱性をつぶしていくことが防災であり、災害に強い街になるというように考えました。その延長で、東京は今どんどん綺麗な街になっているというのも事実ですけれども、そうやって街にあった脆弱性がどんどん減っていくんだという考え方です。

ところが、それが根本的に破綻をしたのが③2001年のあの9月11日です。アメリカで**同時多発テロ**が起きます。あのテロというのは、まさかと思っていたことが現実にかかる。それこそ“想定外”です。敵がハッキリしていれば、それに対する脆弱性も明らかになるのですが、敵がどんどんどんどん増えてしまうと、そのいろんなリスクに対して対抗していかななくては行けない。むしろ大事なものは、災害に遭って少し凹むかもしれませんが、それに負けない、もう一度立ち直れる、そういう社会を造っていかなくては行けないというのが基本になります。

災害に負けないしなやかな社会

それで最近のキーワードはということで、今日のタイトルの副題にさせていただきましたけれども、“災害に負けないしなやかな社会”、そういうものを造っていかうというようなことを考えています。“災害に負けない社会”というのは具体的にどういう社会かというと、それぞれの組織が自分たちの本来やらなければいけないことをどんな状況になっても継続できる力、それをそれぞれの組織が高めていかうということを意味していると考えていただいて良いと思います。その事業継続能力というのをリジリエンスという言葉で表わせます。リジリエンスというのは心理学の分野ではわりと普通に使われている言葉だと言われていますが、防災の分野でも21世紀に入ってからたいへん重要なキーワードになりました。

リジリエンスのイメージというのを見ていただくために、ここにこんな絵を描きました。普段はそれぞれの組織が100%の機能を果たしている。災害が起きて被害が発生してしまうために機能喪失が起きる。その上で、それを一生懸命復旧しようとする。その間、三角形のくぼみができるわけですが、これが事業中断の部分である、あるいは組織が持っている脆弱性だという風に考えていただいてもいいかもしれません。そうするとそれを減らしていく、つまりこの三角形の部分を減らしていくことが事業継続能力の向上になるわけですが、基本的に二つの方向がある。面積を半分にしようと思えば、三角形ですから落ち込みを減らせれば良いわけですね。それから立ち上がりも早くても減るわけです。この二つのオプションを適切に組み合わせる。あるいは資源の当て方を工夫する。そういうことを総合的に進めていくことが新しい防災の姿なのではないかと思っています。

リジリエンスというのは回復力です。立ち直る力です。残念ながら立ち直る力は有限です。有限の立ち直る力を最大限生かすためには、あらかじめやバイと分かっているハザードについては予防措置をしてパッチを当てておく。リスクを順番に並べることにしたのは、そういうパッチをどこまで当てるかを冷静に考えることが必要なんじゃないかということです。パッチが当たっていれば、それを抜けて、いきなり回復力を働かせなければならぬ危険は減っていくわけですので、全体としての立ち直りのチャンスというのは増えると思います。何が予防されるべきで、どこまで予防されるべきか決めるのは、じつはリジリエンスの側の判断だと思うようになりました。それはとくに東日本大震災以降、強く思っているところです。この重み付けを間違えると総合性が失われていくんだという風になるんだと思います。



社会のストックの再建(復興)

幸か不幸か災害というのも、発生直後は、ひじょうに早い周期というか、時間の経過でどんどん状況が変わっていきますので、次々と場面が展開していく。そういう混乱というのは数カ月で社会的には終わる。この東日本大震災でも夏までに、ある意味では、表面上落ち着きは取り戻しているわけですが、それで問題が終わったわけではなくて、実は何年も掛かるたいへん大きな長いプロセスです。ところがイベントとして見ると、ほとんど無いんです。そういう辛い日常を毎日毎日繰り返していく。最終的にはそれを受け入れる。そういう自己受容のプロセスみたいなものが、復旧復興期の特徴なんです。こうやって考えると、応急対応期と復旧復興期というのは全然違うメカニズムで区分をし、対応というのもして行かなくては行けないのではないかという風に思います。

この復興ということですが、今、東日本はここに入ったところですが、どうなるのかと言うと、実はたいへん複雑な問題があります。まず社会基盤を戻す。それをしないと住まいも戻りませんし、経済も戻らない。住むところが出来て、働く場所がないと、生活が戻らないということを考えていただくと、こういう複雑な構造の中で、様々な事業を同時に進めるのが、復興事業と思っていただいてもいいかもしれません。阪神淡路大震災のときには、全部で1000、こういう事業が復旧、復興の中で実行されていますから、非常に複雑だということもお分かりいただけると思います。あの当時はまだ場所が小さかったですし、人もたくさん居ましたので、社会基盤は2年で戻りましたし、住宅は5年で戻りました。都市計画もほぼ10年で元に戻ったんですが、97年以降の経済不況のために経済は戻らない。ということは結論として被災地の生活も戻らないという状況がずっと続いているということになります。



創造的な復興を実現するために

どうしたら生活再建が出来るのかというのを、震災から5年経ったところで調査をしてほしいと神戸市の方から頼まれまして、被災者自身に聞いてみたら、こういう風に答えてくれました、というのをご紹介したいと思います。7つの要素がありました。その中で、みんなが一番大事だと言ったのは、「自分の住まいが戻ること」でした。二つ目に大事だと言ったのは、「人間関係」でした。私も社会心理学をやっていると言いながら、まさかそんなものが出るとは思わなかった訳ですけども、いきなりこのグラフでいうと2番目になっちゃった。どういうことかと言うと、正直に言って神戸の人達がそんなに豊かな人間関係の中で暮らしていた訳ではありません。ただ人との関係無しには暮らすことは出来ない。以来、ほとんど仮設住宅というのが集落単位で、通常の人間関係を切らずに動くようになりましたけれども、それはどちらかと言うと、ここから出発しているのかもしれない。

今、そういう阪神の経験を踏まえて、いろんなところで「復興のためにこうしたら」と申し上げているのは、復興の一番の基本は**経済再建**ではないかという風に言っています。それをするための道具として都市の再建というのがある。都市の再建というのは公費が投入できる訳ですから、国としてはこれが一番やりやすい。だけど、これを自分たちの好き勝手にやってみようと、一番大事なときにお金が入らない。ですから経済再建のグランドビジョンのもとに適切なタイミングに資金が投入されるような仕組みにしないと、結果として復興というのは出来ない。被災者から生活再建が大事、大事と言われるんですが、そうやってお金をもらって暮らすような生き方というのは、余り健全だとは言えない訳で、むしろ経済を活性化することによって、いわば余剰の税金をもって、それを自分たちで配分するような仕組みにしたらどうでしょうというようなことをずっと言っています。

教養講座 要旨

第13回教養講座 2012年 5月19日

「なぜ構造構成主義は復興支援活動に役立ったのか？ーふんばろう東日本支援プロジェクトの活動を通してー」

西條剛央（早稲田大学大学院商学研究科 MBA 専任講師）

1. 構造構成主義とは何か

総合領域としての人間科学が、異なる領域のあいだの不毛な信念対立を解消し、建設的なコラボレーションを生み出すため「原理」(メタ理論)として考え出されたのが、構造構成主義です。これは新しいICチップみたいなもので、いろいろな学問領域に組み込んで役立てることが出来ます。2005年に「構造構成主義とは何か 次世代人間科学の原理」(北大路書房)を上梓しました。「現代のエスプリ」に特集されたり、毎号テーマを決めて「構造構成主義研究」という冊子を出したりしています。震災前までは「そこそそ学問の世界に広がっていけばいいな。あまり有名になり過ぎると面倒くさい」ぐらいに思っていました。

2.ふんばろう東日本支援プロジェクトとは？

それが震災の現場に行ってみて、被害もすごいんですけども、システム上の問題で物資が届かないとか、届いても公平主義で数が合わないとか配らないというのを目の当たりにし、震災をキッカケに日本の社会が抱えていた不合理が一気に表れてきたと痛感しました。そこでツイッター、ホームページ、フェイスブックを利用して活動をはじめ、3千カ所以上に物資を届けたり、アマゾンから3万個以上の物を送ったり、行政が集めたまま配られていない物資を10tトラックで40台分くらい運んだり、家電を2万5千世帯以上に送ったりしました。



3.方法とは何か

ここで紹介したいのは「方法の原理」ということです。方法というのは①特定の状況で、②特定の目的を達成するための手段なんです。そのことに例外はない。例外がないということは原理的なことです。であれば絶対的な正しい方法がどこかに転がっているわけではなくて、その都度、①状況に応じ、②目的を達成するために有効な方法を見つけるか、作れば良い。

4.正しさから有効性へのシフトチェンジ

「正しい」と言ったとき、その中には暗黙裡に絶対性が折り込まれています。「あなたは間違っている」と言われると、本当はそうだとしても、心が傷ついてしまい、認めがたい。そうではなくて「方法の有効性」の方にシフトすれば議論もスムーズに進めやすくなる。現在は変化のスピードが速い時代なので前例を踏襲しては満足に機能しない。その都度新しい方法を見つけることが有効です。個々の知識以上に方法の使い方の知識が大切になります。

5.信念対立

関心が強いと信念対立が起きやすい。微細な差に敏感になり、ちょっとした違いが許せなくなる。組織というのは「心」を持った人間の集まりなので、話しても余計ケンカになってしまふこともあります。「話せば分かる」とは限らない。合わない人とは付き合わないというのも一つの知恵ですが、チームで何かをしようとすると、そうも言っていられません。

ボランティアというのは誰でも「自分は正しいことをやっている」と思っているので、相手と対立すると、「自分は正しい、だから相手が間違っている」と思ってしまうがちです。

6.関心相関性と契機相関性

「水溜まり」もふつうは邪魔なだけだが、砂漠では大切なものになります。様々な存在・意味・価値は、身体・欲望・目的・関心に応じて規定されます。存在と認識は切り離せないものです。自分が「当たり前」と考えていることも他の人から見たら、当たり前ではないのです。

自分の関心は体験(契機)から自然に形作られるので盲点になりやすい。さらに関心に応じて価値が表れるのでいっそう見えにくくなります。①体験(契機)→②関心→③価値といった順に作られるので、③価値判断で対立した場合、→②関心→①体験(契機)と遡る思考法がないと、信念対立から抜け出せなくなります。自分の価値判断の元になった体験や関心を忘れがちになります。

7.感謝することの大切さ

ボランティア活動を一年間やって来て、「感謝すること」の大きさを痛感しています。感謝の反対は何かというと「当たり前」なんですね。感謝というのは自分も相手も同時に肯定することです。生命は肯定されたがっている。一生懸命やっているのに否定されると傷つく。傷つけられた悲しみが、怒りとして表わされる。まず相手を肯定することからスタートする。

自他の関心のズレを自覚し、相互に了解可能なメタ関心(共通目的)を共有する。共通目的に照らし、どちらの関心が妥当か問い合う。こういう考え方はテーマを問わず、いろいろな分野で役に立てることが出来ると思います。

エッセイ

「野良研究者」



関谷 大輝 Ph.D.

(社会福祉士, 専門社会調査士)
横浜市北部児童相談所 児童福祉司

“野良研究者”という言葉をご存知でしょうか。野良研究者とは、野良犬などと同じく、研究者としての“飼い主(研究機関等の雇用主)”がいない無所属の研究者を指します(私の造語です)。私は、2001年に第二文学部を卒業後、自治体の社会福祉専門職として勤務する傍ら、筑波大学の社会人大学院において学位を取得しました(博士論文では、“感情労働”と呼ばれる労働に携わる労働者のメンタルヘルス問題について、臨床社会心理学的な見地から研究を行いました)。そして、現在も仕事を続けながら、通勤電車の中や週末といった空き時間を縫って、データ分析や学会発表準備などの野良研究活動を送っています。

さて、このような話をしますと、私は緻密で計画的な生活を送っているに違いないと思われることがままあります。しかし、実際には、山積する課題をダラダラと先送りすることの連続で、日々自己嫌悪に苛まれているのが実情であることを、自戒と反省の念を込めてここで白状したいと思います。実は、野良研究者として最も苦労するのは“モチベーションの維持”なのです。かの松井秀喜選手は、自由契約選手として所属チームがないまま自主トレに励んでいた今春、「ユニホームを着ずに一人で緊張感を保つのは難しい」とこぼしたそうですが、この言葉は、そのまま野良研究者にも当てはまります。無論、あの松井選手でさえ難しい課題を、私が簡単に乗り越えられるはずありません。

研究は、時間も体力もお金も消費します。一方で、野良研究者は研究しなくても誰にも迷惑をかけませんし、生活自体は成り立ってしまいます(むしろ自由時間は増えます)ので、時折「なんでこんな苦労を続けてるんだ?」と思わず自問してしまいます。「研究は趣味。好きなこと、楽しいことなだから、モチベーションに気を使う必要などない!」...と言えることが理想ですが、常に“好きで楽しい”とはいかないのが研究でもあります。そこで、最近では、学びや研究は私にとって趣味ではなく、さながら武道や仏道のように、ライフワークとして極めていくべき“道”、すなわち“野良研究者道”だと思いうようにしています。格好つけたような言い方ですが、こう考えると、日々抱く自己嫌悪感も修行の一環と思えて来て、ちょっと前向きになれる効用もあるのです。

社会人大学院への進学に不安や抵抗が少なかったことを含め、私が野良研究者になった原点は、二文で学んだ4年間に、バイタリティ溢れる多くの社会人学生に囲まれて、学びや研究への取り組みに年齢的・職業的な垣根はないと教わったことにあります。在野での野良研究はまさに早稲田的とも言えますし、チャレンジだからこそ何かを達成した時の喜びはひとしおです。野良研究者道の求道は決して楽ではありませんが、いつか“悟り”を開ける日が私にも訪れることを信じて、今後も地味に地道に研究に携わっていきたいと思います。

発行元: 早稲田大学心理学会
〒162-8644 新宿区戸山1-24-1
早稲田大学文学部心理学教室内
電話 03-5286-3743 FAX 5286-3759

担当: 石井康智

メール: waseda_shinri@yahoo.co.jp
担当: 朝岡美好

書類発送元:
一般社団法人学会支援機構
〒112-0012 文京区大塚5-3-13
小石川アーバン4F
電話 03-5981-6011 FAX 5981-6012

早稲田大学心理学会ホームページ:
<http://www.waseda.jp/assoc-wpa/>
※情報の変更、更新、追加などは適宜、
早心HPにてご確認ください。